

# セルフ・マネージメントスキル獲得のための模擬喫茶店舗

ポジティブなフィードバックが正の強化として機能するための環境設定について考える

Simulated Shop for Acquiring Self-Management Skill

濱口翔子・高山仁・土田菜穂・中鹿直樹

Hamaguchi S, Takayama H, Tsuchida N, Nakashika N

立命館大学

Ritsumeikan University

Key words: セルフ・マネージメント, 正の強化, 学生ジョブコーチ

## 目的

立命館大学では学生ジョブコーチ(Student Job Coach)による、障害のある個人への支援を行なっている(中鹿2010)。太田ら(2008)は、ジョブコーチによる対象者の自己決定に根ざしたQOLの拡大には、自分で自分の行動を積極的にモニターし、かつコントロールするセルフ・マネージメントスキルの獲得を目的とした援助が必要であり、セルフ・マネージメントスキルの構成要素には、自己観察記録(self-monitoring)自己評価(self-evaluation)、自己強化(self-reinforcement)の3つの段階があると述べている。本研究は、支援学校高等部の生徒を対象に、大学内の模擬喫茶店舗という特性を活かし、また、個人の「できる」の発見、拡大を記述すること。また、正の強化を目的としたフィードバックが、個人の「できる」に変化をもたらし、セルフ・マネージメントスキルの成立につなげることを目的とした。

## 方法

**対象生徒** 特別支援学校高等部1年に在籍する軽度知的障害をもつ男子生徒であった。

### 1. 事前準備

SJCが現在の対象生徒の情報の聞き取りや、対象生徒の学内での作業学習の観察を行い、結果を整理した。参加者本人を含めた面談で学校や保護者に参加同意を得て、実習参加者に計算やコミュニケーションについてのアセスメントを行ったのち、「できる」を発見するための実習内容と援助設定を決定した。事前の面談で、担当教員から実習の目的として挙げられたのは1)臨機応変な対応ができるようになること、2)質問に答えられるようになること、3)確認行為をせず自分で動けるようになること、の3点であった。

### 2. 実習内容

**期間** X年Y月中旬に5日間実施した。

**実習内容** 実習参加者は模擬喫茶でのホールスタッフとしての業務をすることを求められた。SJCは事前に得られた情報をもとに手順書・機材配置の変更と「できる」に対する賞賛。また、確認行動を減らす工夫を行うことで参加者の自主的な仕事への参加を促した。

### 3. 実習終了後

対象生徒の「できる」ことを報告会で伝え、支援学校の教員や保護者と対象生徒の情報共有を行った。

#### 結果

5日間の実習を通して業務の自立遂行率は上がり、さらに事前の面談で挙がっていた3点についても多くの「できる」を発見した。以下に、臨機応変な対応の具体例を示す。「手順書は1人の客の来店に対して構成されていたが、同時に複数名の来店があった際には、ドリンクをまとめて作ること」「店長が注文の入った商品が品切れであることを伝えるように頼んだ際、試作品として作ったお菓子を提供できるのではないかと提案すること」などであった。また、質問は選択肢を与えるなど質問の仕方次第で答えられる。さらに、確認行為は対象者の行動を待ち、その場に適した行動に対して即座に正の強化を与えるという対応を続けるとことで減少し、同時に、セルフ・マネージメントスキルに必要な自己評価の成立につながった。

#### 考察

実習開始前の「できる」ことから、模擬喫茶店舗での実習を通して、より多様な対象生徒の「できる」ことが確認され、これまで課題として挙がっていた確認行為についても、対象者の行動を待ちその場に合った行動に対して即座に正の強化を行うことで、セルフ・マネージメントスキル形成に必要な自己評価をできるようになった。このように、模擬喫茶店舗という構造化場面を通してより詳細に確認し、それに応じた支援を検討することは「できる」の拡大につながると考えられる。

#### 文献

中鹿直樹.(2010). 対人援助学の実践と教育の場としての「学生ジョブコーチ」. 望月 昭・サトウタツヤ・中村 正・武藤 崇(編)「対人援助学の可能性—「助ける科学」の創造と展開」.  
太田隆士・稲生ゆみ子・松田光一郎・望月昭.(2008). 総合支援学校高等部生徒の職場体験実習における機能分析とセルフ・マネージメント行動の獲得に向けて. 立命館人間科学研究, 17, 115.